

## 花を瓶にさすこと ―『枕草子』第二〇段に関連して―

高橋由記

### 一 はじめに

「清涼殿の丑寅の角の」で始まる『枕草子』二〇段(1)は、諸氏の考証により、正暦五年(九九四)春が史実年時であり、まだ新参気分の抜けない清少納言が、中関白家盛時の様子を記録したものと評されている。執筆時点は道隆薨後であるといわれているが、没落後の暗さを表面には感じさせないという『枕草子』の特徴をよく表しているといえよう。第一部ともいえる部分には、次のような描写がある。

高欄のもとに、青き瓶の大きなを据ゑて、桜のいみじうおもしろき枝の、五尺ばかりなるをいと多く挿したれば、高欄の外まで咲きこぼれたる昼つ方、大納言殿、桜の直衣のすこしなよらかなるに、濃き紫の固紋の指貫、白き御衣ども、うへには濃き綾のいとあざやかなるを出だしてまゐりたまへるに、主上のこなたにおはしませば、戸口の前なる細き板敷にゐたまひて、ものなど申したまふ。(傍線筆者、以下同)

このあとに続く場面には、天皇・中宮・伊周のそろつたためたき場面で、定子が女房達に「ただ今おぼえむ古き言、一つづつ書け」と命じ、とまどう女房達のなかで、清少納言のみが上手く答え、定子

より「ただ、この心どものゆかしかりつるぞ」という褒め言葉をもたらったことが描かれている。その答は「年経れば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」を「君をし見れば」に改作したものであった。

清少納言が引用したのは周知の如く『古今和歌集』巻第一・春歌上の前太政大臣(良房)の歌(2)、

染殿後の御前に、花瓶に、桜の挿させ給へるを見て、よめる

年ふればよはひは老いぬしかはあれど花をし見れば物思もなし

(五二)

であるが、娘である染殿后(明子)を花に譬えた父・良房のこの歌(3)と『枕草子』二〇段は、花を瓶にさしていること、「(天皇)――中宮――中宮の身内」という図式と、実に類似点が多い。そのことについては、早く清水好子氏が、定子は『古今和歌集』を意識してこの場面を構成したと述べられた(4)。しかし、氏は『枕草子』を『古今和歌集』と結ぶ役割を果たしている「花を瓶にさすこと」について「花を瓶に挿して楽しむことは当時においてそうありふれた誰でもがすることではなかったようだ」とされ、その趣向の斬新さに、定子の「宮廷文化を創る人」としての才能と役割を見る

と論じておられる。

そこで、事実、花を瓶にさすことは日常ではあまり行われなかったのかを探ることにより、この章段における定子の趣向の面白さ、清少納言の答の重要性・妥当性はいかなるものであったのかを再検討してみたいというのが本論の意図することである。

## 二 『馬内侍集』と『枕草子』

前掲の二〇段に関する諸氏の評としては、この段が二段「ころは」に影響を与えたことに触れるものが多い。「ころは」の段の「三月三日は、」以降には、「おもしろく咲きたる桜を、長く折りて、大きな瓶に挿したるこそをかしけれ。桜の直衣に出だし桂して、客人にもあれ、御兄の君達にても、そこ近くあて、ものなどうちひたる、いとをかし。」という描写があり、これは、二〇段の体験をもとにして書かれたものとするものである。

しかし近年、三田村雅子氏が、『馬内侍集』をもとにして『枕草子』二〇段の清少納言の答に新たな解釈をなされた(5)。氏が参考にした馬内侍の歌は、

清涼殿の御つぼねにうへわたらせたまひて、梅のはなのすくなくさきたるを、けじめもみえじかしすくなければとおほせられしかば

さかりありてちらましいかにおしましころのどけき春のはなかな(一)

おなじとしの三月に、中宮の御かたに花をかめにさませたまひて、これがちる心よめとおほせられしかば

である。従来、馬内侍が詮子の女房としての経歴を持つと記された『尊卑分脈』により、詞書の「東三条」は「東三条第」を指すとし、

「東三条詮子」との関連を示す一資料とされてきた(9)。しかし、

松田安紀子氏は、詮子が実際に東三条院に居住していた時期を表にされた上で、「詮子は正暦二年十一月以降は全く東三条院と関わりがない。」と述べられ、馬内侍が詮子の女房をしていた可能性を否定された。そして、「東三条」はたぶん定子の父道隆が住んでいた東三条南院のことで、そこに咲いていた桜が定子のもとに届けられていた」とし、一九八番歌は定子の女房をしていた時期の詠歌と結論付けられた。また、その時期についても詞書の「少納言のくら人」という呼称より、道長をその人とし、長徳元年(九九五)が適当とされた(10)。

清水氏は『馬内侍集』二番歌詞書の「中宮」を円融天皇中宮・皇子のこととし、また一九八番歌の「東三条」については言及をされていない。しかし、森本氏・福井氏・松田氏の説をまとめると『馬内侍集』の中には、二番歌・一九八番歌と、定子後宮で花を瓶にさした際の詠歌が二回認められることになるのである。そして、この二首は同時期のものとは考えがたいであろう。また、さきに述べたように『枕草子』第二〇段の史実年時は、正暦五年(九九四)であるから、『馬内侍集』一九八番歌とは年時が異なる。仮に『枕草子』と『馬内侍集』の二番歌の詠歌年時が同一であったとしても、それが同一日であったのかまでは、定かではないであろう。

以上のように、定子後宮では複数回、花を瓶にさした用例があったことが理解されよう。あるいは、毎年そうしていたのかもしれない。

ちらじとやたのめそめけんはかなくもとまらぬ花にそふ心かな(二)

の二首である(6)。氏は詞書から、二番歌は定子の下問による詠歌の可能性が大きいとされた。さらに「この時代、花を瓶に生けることが、仏に供える場合を除いては極めて特殊な、稀なことであったことを考えると、馬内侍が中宮の命を受けて散る花の心を詠んだ折と、枕草子の「清涼殿の丑寅の隅」の詠歌の折は、或は同一の時であったのではないか」とも述べられ、『枕草子』二〇段の定子の〈問〉に対する馬内侍の〈答〉の妥当性、ひいては清少納言の答のみが唯一の正答と考えることへの疑問を投げかけられたのである。

『馬内侍集』巻頭に見える二首の詞書の「うへ」「中宮」が一条天皇と定子であろうことは、福井迪子氏(7)・森本元子氏の述べられたことであり、そのまま受け入れてよいであろう。

馬内侍の詠歌と、清少納言の答が同一時点のものとなると、三田村氏のいわれたように清少納言の答の妥当性はあやふやなものになる。『枕草子』に記した自讃段は、ある意味では清少納言の一人合点になってしまいうからである。しかし、二つの出来事が同時であったのかは、現存の資料だけでは肯定も否定もできないであろう。

ところで、定子があるいは花を瓶に飾ることを毎年行っていたのかもしれないと思われる資料がある。それは同じく『馬内侍集』の、

東三条のはなをるりのつぼにさして、たのごひのはこにすへて、これはちりにけるを、あたらしくさしてまいらせよとて少納言のくら人といふ人につかはし、

さくら花たれに心をかよはしていかに匂ひをとどめざるらん(一九八)

それでは、三田村氏が述べられたように、平安時代において花を瓶にさすことは「供花」が一般的であり、観賞用花を瓶にさすことは稀であったのかについても考察してみたい。

## 三 依代・供花から生け花へ

花を瓶に挿すこと、現代風にいえば「生け花」であるが、この生け花は、定子後宮で行われていたような観賞用花とはあまり関係がない、というのが通説である。そして、その源泉については次の二通りの説があると思われる。

ひとつは神に対する「依代」である。桜井満氏は、その著書『花の民俗学』(11)・『花と日本人』(12)の中で仏教以前の日本人の信仰生活を考え、神まつりのためにその依代として立てる植物に注目し、それを生け花の源流とされた。『日本書紀』『神代上』には、伊弉冉尊が火神を生んで死に、紀伊国の熊野の有馬村に葬られた際、土俗(くにひと)が伊弉冉尊の魂を祭るために「花の時には亦花を以て祭」った例がある(13)。仏教伝来以前にも供養としての献花のあったことが理解されよう。

他方、従来よりいわれているのが「供花」である。供花とは仏に花を供えること、もしくは、その供えられた花そのものをさすが、『いけばな辞典』は、神の依代としての花を紹介しながらも、日本人の花への関心を深めることへ最も影響を与えたのは供花であると(14)、この供花が「いけばな」の源流とされている」と述べている。また、西堀一三氏の『日本花道史』(15)や、久保田滋・瀬川健一郎氏の『日本花道史』(16)、『国史大事典』「いけばな」の

項にも、供花が発展して生け花になったことが書かれている。『過去現在因果経』には、天平七年（七三五）のこととして供花図・供花のことを載せており、奈良時代の初期にはすでに供花のあったことがわかる。

本論は、生け花のルーツを探ることを目的としたものではないので、生け花の源泉についてはこれ以上の考察は控えるが、花を神仏に供えることは古く、記紀・万葉にも例のあることを確認しておきたい。また「供花」という行為を意識してのものとして天平勝宝四年（七五二）の東大寺の大仏開眼供養の際の献歌（17）が挙げられている。このことから、献花としての供花も奈良時代から行われていたことが理解できる。

#### 四 平安時代の供花

平安時代になると、仏教の発展とともに供花はますます盛んになったことが、北条文彦氏の「長講堂の供花のついて」によりうかがうことができる（18）。氏は平安時代の文献等に見える供花関係の記事を表にまとめられたが、それによると、延喜七年（九〇七）十月から平治元年（一一五九）七月までの間に合計五一回の用例が認められるのである（19）。その特徴として、氏は「このような供花（花供養）は、十世紀初頭から藤原氏の氏寺であった極楽寺で営まれていた菊会（菊花会）とか蓮花会ともって嚆矢とするらしいこと」、極楽寺の菊会は延喜七年から安和二年（九六九）にかけて行われていた行事であることを述べられた。

表をみると供花の用例は、ある時期（五十年から七十年を周期と

宮の御めのとこのおさなきがもとより、むめのはなをほとけにたてまつれとて、をこせたるに

おこせたるやどのにほひをあはれなるちりにしはなのゆかりと思へば

6 成通集・九二

皇嘉門院に女房共供花以百種花供仏、可被奉訪北政所菩提、其

中或女房云献結花之日欲相具和歌一首、可綴作読之

はらず葉に消にし露をもらさじと契りを結ぶ花としらずや

和歌の用例は、いずれも平安時代後期のものであるが、漢文記録に残っているもの・『源氏物語』・和歌を総合して考えると、供花は、平安時代を通じて行われていたと考えてよいと思われる。

#### 五 瓶にさすこと

『枕草子』二〇段に書かれている花は「供花」ではない。定子が観賞用として、花瓶にさしていたものである。一方、依代や供花は花を神仏に供えるためのものであり、花そのものの観賞が主眼ではない。では、花を愛でるために瓶にさしたのはいつごろから始まったのであろうか。

桜井氏はその例として『万葉集』の次の三首（22）を挙げておられる（23）。

三日に、守大伴宿禰家持の館に宴する歌三首

今日のためと思ひて標めしあしひきの峰の上の桜かく咲きにけり（巻十九・四一五一）

する）に集中して見られるようにも思われるが、文献等に残らなかった供花の存在も考慮すると、供花そのものは相当数あったと思われるのである（20）。また、史料以外の用例も考えれば、その数はさらに増えよう。たとえば、『源氏物語』（21）には次の二ヶ所の用例がある。

1 春の上の御心ざしに、仏に花奉らせたまふ。鳥蝶にさうぞき分けたる童べ八人、容貌などことにととのへさせたまひて、鳥には、銀の花瓶に桜をさし、蝶は、黄金の瓶に山吹を、同じき花の房いかめしう、世になきにほひを尽くさせたまへり。南の御前の山際より漕ぎ出でて、御前に出づるほど、風吹きて、瓶の桜すこしうち散り紛ふ。（「胡蝶」三・一六三ページ）

2 夜の御帳の帷子を四面ながらあげて、背後の方に法華の曼荼羅懸けたてまつりて、銀の花瓶に高くことごとしき花の色をととのへて奉れり。（「鈴虫」四・三六一ページ）

さらに、和歌関係の資料にも供花の用例はいくつかある。

3 前斎院撰津集・二六・二七

京極殿の五十講の捧物に、仏の御前の花をしてをこせたりし人心ざしふかくちぎれるはな、ればひとえだとてもきはざらなむ返し

たぐひなきみのりのためにおる花はこのひとえだもにははざらめや4 散木奇歌集・八九一

たえなる花をもりて、つねに仏にたてまつる、といふ事をよめる

もる人はたれともなしにさまぐの花にものりをそなへてぞ見る

5 行尊大僧正集 I・一七〇

奥山の八つ峰の椿つばらかに今日は暮らさねますらをの伴（同・四一五二）

漢人も筏浮かべて遊ぶといふ今日そ我が背子花縵せな（同・四一五三）

この歌は天平勝宝二年（七五〇）三月三日の宴の席でのものである。それに対し、氏は特に四一五一番歌について「今日のこの三日の宴のためにと思つてしるしをしておいたあの峰の上の桜がこんなにみにごとく咲いたことよ、とその美しさを讃えています。「かく咲きにけり」とはいかにも臨場感のある表現です。峰の上の桜を指さして詠んでいるではありませんね。三月三日の宴の花として峰の上の桜を折り取って来ているとみてよいでしょう。宴の席に峰の上の桜が大きな瓶にさし立てられているにちがいません。」と述べられ、桜を瓶に挿して賞翫した最初の記事としておられる。事実そうであるならば、先に挙げた天平勝宝四年の東大寺開眼供養の際の「供花」とほぼ同時期に、花を賞美するために瓶に生けていたことになる。しかし、詞書に頼らず歌の解釈のみで花を瓶にさしていたかを判断するのは主観に依るところが大きいので、以下には明らかに瓶にさしたと分かる例をあげて考察していきたい。

資料に残っているものの中で花を瓶にさした例として最も早いのは前掲の『古今和歌集』の良房の歌であろうが、『伊勢物語』一〇一段には次のような描写がある（24）。

むかし、左兵衛の督なりける在原の行平といふありけり。その人の家によき酒ありとききて、うへにありける左中弁藤原の良近（まさちか）といふをなむ、まらうどさねにて、その日はあるじまうけしたりける。なさけある人にて、瓶に花をさせり。その

花の中に、あやしき藤の花ありけり。花のしなひ、三尺六寸ばかりなむありける。それを題にてよむ。よみはてがたに、あるじのはらからなる、あるじし給ふときとて来たりければ、とらへてよませける。もとより歌のことは知らざりければ、すまひけれど、しひてよませければ、かくなん、

咲く花のしたにかくるゝ人を多みありしにまさる藤のかげかも

「などかくしもよむ」といひければ、「おほきおとゞの栄花の盛りにみまそがりて、藤氏のことには栄ゆるを思ひてよめる」となんいひける。皆人、そしらずなりにけり。

清水氏は『古今和歌集』の詠歌時期を、嘉祥三年（八五〇）から天安二年（八五八）とされている。一方、『伊勢物語』一〇一段の例は、行平が「左兵衛督」になつた貞観十六年（八七四）と、良近が左中弁に任じられた貞観十六年（八七四）を参考にすれば、それより二十年ほど遅れていることなる。なお、史実では行平の左兵衛督の任期と、良近の左中弁の任期は重ならないことを述べておく（25）。

この場合の花は「藤の花」であるが、『伊勢物語』によると、花を瓶にさしたのは「なさけある人」だつたからであり、花を愛でることがその人の豊かな資質をあらわしているのである。この描写から観賞用として花をさすことが、供花とは異なつた意義や意味を持っていたことが理解される。

さらに良房・業平以降の「花を瓶にさすこと」の用例を管見の及ぶ限り挙げてみると次のようになる（26）。

①貫之集Ⅰ・八五六・八五七（27）

あつよしの式部卿のむすめいせのこのはらにあるが、ちかうす

たてながらとおもひしものをさくら花おもひのほかにおもひけるかな（29）

⑧大斎院前御集・三二六・三二七

【ま】たの日、さいさうのきみ、さとより、はなびらおほきなるさくらをかめにさして

きみがよはのどかなるべしかめ山にさくらの花のにほひことなり

返し、馬

きみがよにさくらの花はかめ山にさしてにほひのまさるべきかな

⑨伊勢大輔集Ⅱ・一六

女院のうちにおはしまししとき、御だうのまへに、かめにさくらをさゝせ給へりしが、久しくちらざりしかば

つきもせずかよひひさしかめ山の桜は風もちらさざりけり

⑩弁乳母家集・一一

はぎのすゑをりてかめにさゝせたまへるを

あさゆふにかぜのみしげきのべよりもひさしかるべきはぎのすゑ哉

⑪二条大皇太后宮大式集・三四・三五

四月ついたちごろ、さかりなるさくらを人のをこせたる、かめにさしておまへにをきたるに、三四日ちらず、源中納言のがりつかはしゝ

くものうへにちとせとちぎる君がよははなもときはのさくらなりけり

をこせたりし人の、いかゞと申たりしに

めづらしとくものうへまでたづねみきはるよりおちしてさくらをまとのゝひこのきみにみせれば

はるはいかにちぎりをきてかすぎにしとをくれてにほふはなにとは

む所ありけるに、おりてかめにさしたる花をくるとてよめるひさしかれあだにちるなと桜花かめにさせれどうつるひにけり返し

千世ふべきかめなる花はさしながらとまらぬことはつねにやはあらぬ

②馬内侍集・一・二（前出）

③馬内侍集・一九八（前出）

④惟成弁集Ⅰ・二二

春宮亮になり侍て、はる、おもしろきさくらを、かめにたてさせたまて、殿上人にうたよませたまふに

たにかぜにはるまちわびし花さくらかゝるうれしきおりもありけり

⑤紫式部集Ⅰ・三六・三七（参考Ⅱ・三六・三七）

さくらをかめにさしてみるに、とりもあへずちりければ、もゝの花を見やりて

おりてみばちかまさりせよゝの花おもひくまなきさくらおしまじ返し、人

もゝといふ名もあるものをときのまにちるさくらにもおもひおとさじ

⑥紫式部集Ⅰ・五三（参考Ⅱ・五四）

世をつねなしなどおもふ人の、おさなき人のなやみけるに、かたけといふものかめにさしたる、女はらのいのりけるをみてわか竹のおひゆくすゑをいのるかなこの世をうしといふものから（28）

⑦道命阿闍梨集・二四四

かめに、さくらのはな・（傍「を」）さしたるを

ゞや

返し

とはましをはなのものいふなりせばあかですぎにしはるのゆくゑを

⑧粟田別当入道集（惟方）・一九

新院、くらゐおりさせたまひてのち、八条院、姫宮と申まいらせしとき、さくらはなをかめにさして、宮の御かたへまいらせさせたまひたりしを、女房たち、いかゞ申べきなどありしかば、かくぞおぼえ候と申

こゝのへの雲井にみえしさくらばなおりてはまさるにほひなりけり

さらに、歌合の用例（30）も加えると次のようになる。

⑨天喜四年（一〇五六）四月卅日 皇后宮寛子春秋歌合

末の春加はれる年、花ものどやかにやと思ひやるをりに、白雲のかかる桜の匂ひは比ひあらじとみゆるを瓶にさされたりし。

ここに挙げた歌合を主催した寛子は、前掲の北条氏の表によると、供花として花を瓶にさした用例も多く見られた人物であることを付け加えておく。『源氏物語』には、花ではなく紅葉ではあるが、瓶にさして観賞した例が見える。

⑩山づとに持たせたまへりし紅葉、御前のに御覧じくらぶれば、こゝに染めましける露の心も見過ぐしがたう……げにいみじき枝どもなれば、御目とまるに、例のいささかなるものありけり。人々見たてまつるに、御顔の色もうつろひて、「なほかかる心の絶えたまはぬこそ、いとうとましけれ。あたら、思ひやり深うものし

たまふ人の、ゆくりなく、かうやうなる事をりをりまぜたまふを、人もあやしと見るらむかし」と、心づきなく思されて、瓶にささてて廂の柱のもとに押しやらせたまひつ。(「賢木」二・一一四ページ)

以上のように、明らかに瓶にさして花を賞美したものは、十六例認められ(31)、瓶にさした花は、ほとんどが桜であったことがわかる。清水氏は用例を挙げられた上で、花を瓶にさすのはあまり例のないことであつたと結論づけられたが、私は逆に資料に残らなかったものの存在も考慮して、花を瓶にさして賞翫することは、日常茶飯のこととまではいかなくても、かなりの用例があつたのではないかと考えるのである。和歌を折り取つた花に挿して贈ることがおこなわれていたことは、和歌・『源氏物語』その他の例から分かるが、その贈られた花を、あるいは保存のために瓶にさしたのではないか。また、桜花を箱のふたに入れたり、薄紙に包んだりした例(32)、散つた桜を集めて置いた例(33)を考えれば、花そのものを瓶にさして賞翫することも、そう珍しくはなかつたのではないだろうか。瓶にさせば間近で花を見られるのであるから、立ち上ることすら稀であつた平安時代の貴族層の女性達にとって、観賞用花をさす瓶は案外に重宝ではなかつたのかと、想像を巡らせるのである。

## 六 花をさすこと

また、参考として、花を「すすりがめ」・「すすり」・「すびつ」・「折櫃」にさしたものの用例の歌をあげておこう。

A 伊勢大輔集Ⅲ・三(34)

ぬか、とこぜのおほせごとあれば、あなおそろしとてたちてをこせたまへる、いなば

いひかけばよにもいけらしみづのおものうたかたをだにしらぬみなれば

返し

あさきにはいひやはかくるみづのおものけしきばかりにさはぐなみかな

F 道命阿闍梨集・一六八

すびつに、花をさしてみる人のあるに

うつみひのちかきかぎりはさくら花ちるともちりはたてじとぞ思

G 赤染衛門集Ⅰ・四九一(参考Ⅱ・四二)

むめのはなをよりておさなき人のすびつにさしたるを

うしろめた風ふかずともうつみ火のあたりの花はちりやまさらん

H 行宗集・五五・五六

内大臣殿に、折櫃にとりをいれてむめのはなさしてまいらせた  
りしかば

うぐひすやぬぎすてけむきさへいつよりきるぞむめの花がさ  
かへし

きさずさへさしたてまつるしにはむめの花がさかりてきたるぞ  
I 治暦二年(一〇六六)五月五日 皇后宮寛子歌合(『平安朝歌合大成』)

右方、造花瑠璃長櫃内、然前栽仕丁荷之鉢也。

## 七 まとめ

女院のうちのおはしましゝおり、すゞりがめにさくらの花をさ  
ゝせたまへりし、いみじうひさしうちらざりしかば

つきもせずよはひさしきかめやまのさくらは風もちらさざりけり  
B 江帥集Ⅰ・四二五

さくらはなを、すゞりがめにさしたるが、それものこりなく  
ちりたれば

やまざくらこずゑのかぜをいとふとておれどもはなはのこらざりけり

C 二条大皇太后宮大式集・一六一・一六二

すゞりがめに、さうぶのねをきりていれたりしか、をひいでた  
りしをまいらすとて

たれかみしよにすみえのもの人のすゞりのかめにさすあやめをば  
かへし、つのきみ

すみのえのすゞりのかめのあやめ草ちよのためしにひきてこそみめ

D 栄花物語・巻第九 岩陰(35)

念仏の声の、日の暮るゝ程、後夜などのいみじうあはれに、さま  
々悲しき事多くて過ぎせ給に、御前の撫子を人の折りて持て参り  
たるを、宮の御前の御硯瓶にさゝせ給へるを、東宮取り散らさせ給  
へば、宮の御前、

見るまゝに露ぞこぼるゝ後れにし心も知らぬ撫子に花」。(三

〇七ページ)

E 四条宮下野集・一二・一三

後撰の上下巻、いなばのきみ、ふたり、かゝせ(傍「させ」)

おはしますに、すゞりにきくのはなをいれたまへるを、かきく  
もののうくなるほどに、はなをとりてみれば、そのけしきはみ

以上見てきたように、花を瓶や櫃にさすことは、供花以外の観賞  
用のものであつても、多くの用例のあることが認められたであろう。  
確かに供花の方が遥かに資料には残っているが、それは公的な面を  
持つ供花と私的な観賞用花との相違によるものであろう。

ここで、馬内侍その人に注目すれば、『枕草子』二〇段には登場  
していないが、その場に居合わせた可能性も高く、また、『大斎院  
前御集』・『馬内侍集』の用例を合わせると、少なくとも三回は瓶  
にさした花を観賞したことになる(36)。一人の人物でさえこれだ  
けの用例があるのだから、平安時代を通して考えるならば、その用  
例も決して少なくなかつたはずである。瓶にさした花が資料に残ら  
なかつたのは、記録者の嗜好もしくは、その行為自体の性質の問題  
——たとえば記録をあまり残さない女性が好んだ等——があるので  
はないか。

そのなかで、定子後宮では複数回、あるいは毎年、花を瓶にさし  
て観賞していたことが理解される。瓶にさした花に関する定子の下  
間も、複数回にわたつた可能性が考えられる。つまり、あるときは  
「これがちる心よめ」といい、また「ただ今おぼえむ古き言、一つ  
づつ書け」と命じ、常に女房達の教養を試していたとも想定できる  
のである。そうであるとする『枕草子』二〇段の、他の女房に対  
する清少納言の「など、さは臆せしにか。すべて、面さへ赤みてぞ  
思ひみだるや。」という描写が、どこまで真実を伝えたものであ  
つたのか疑問の残るところになる。

しかし、『枕草子』の虚構性を認識しつつ、あえて二〇段に描か  
れた「天皇—中宮—中宮の身内」と「瓶にさされた花」という状況  
を信じれば、この場合に定子が意識していたのは、従来言われてい

るように『古今和歌集』の良房の例だったであろう。模範とするには、歌集などに残っているものである必要があるし、『古今和歌集』の例は詞書を考えても、なお好都合であつたろう。

したがって、『枕草子』二〇段における定子の下問は、良房を念頭に置いたものであり、その答として「花をし見れば」を「君をし見れば」と改作する清少納言の和歌の知識・機知は、定子をして「ただ、この心どものゆかしかりつるぞ」と言わしめるのである。そして清少納言の答が正答であつたからこそ、定子は円融院の時の三位中将（道隆）の和歌改作の話をしたのであろう。十八歳にして女房達の指導者として十分な才能を見せる定子のあらまほしき姿とともに、当意即妙の改作をした清少納言の機軸の再評価をはかりたい。

(注)

- 1 章段数・本文は、すべて萩谷朴氏校注『新潮日本古典集成 枕草子』（新潮社・昭和五二年）による。
  - 2 本文は『新日本古典文学大系』による。以下、勅撰集同じ。
  - 3 明子を花に譬えたとする解釈は『大鏡』にも見える。以下にそれを載せる。
- 第二巻「太政大臣良房忠公」
- この殿忠公ぞ、藤氏のはじめて太政大臣・摂政したまふ。めでたき御ありさま也。和調もあそばしけるにこそ。古今にもあまた侍めるは。「前のおほいまうち君」とは、この御事也。おほ

かるなにも、いかに御ころゆきめでたくおぼえてあそばしけんをとしはかるゝを、御女の染殿後の御前にさくらのほのかめにさゝれたるを御覧じて、かくよませ給へるにこそ。

としふればよはひはおいぬ、しかはあれど、はなをしみればものおもひもなし。后をはなにとへ申させたまへるにこそ。（本文は『日本古典文学大系』による）

- 4 「宮廷文化を創る人——定子皇后の役割——」（日本文学研究資料集新集『枕草子・表現と構造』有精堂・一九九四・七 所収 初出『金蘭短期大学研究誌』第一号、一九六六・五）以下、清水氏の説の引用は、これによる）
- 5 「（問）と（答）——日記的章段の論理——」（『枕草子 表現の論理』有精堂 一九九五・二 所収）
- 6 以下、私家集の引用はすべて『私家集大成 中古』I・IIによる。但し、私に濁点を施した。
- 7 「馬内侍集の編集意識について」（『校本馬内侍集と総索引』笠間書院・昭和四七・七 所収）
- 8 「馬内侍」補稿」（『和歌史研究会会報』第九号・昭和六一・十二 所収）
- 9 竹鼻續氏「馬内侍伝の一資料——時明集の作者をめぐって——」（『文学・語学』第十三号・昭和三四・九）
- 10 福井迪子氏「馬内侍（四）——その育まれた文芸的環境を中心——」（『鹿児島県立短期大学紀要』第二九号・昭和五四・三）
- 11 「馬内侍集」に関する一考察——東三条のはな——」（『国文』第七五号・平成三・七）
- 12 「花の民俗学（新装版）」（雄山閣出版 昭和六十・四）

天永三年（一一二二）十一月二十五日『中右記』

（『増補史料大成』第十二巻 所収）

- 21 本文は、すべて日本古典文学全集本による。またカッコ内の数字は全集の巻数とページをさす。
  - 22 本文は『日本古典文学全集』による。
  - 23 注12と同じ。
  - 24 本文は『日本古典文学大系』による。
- また、この歌は『業平集』I、IIにもある。

ともだちあまたして、さけたうべけるに、かめに花さしたるを人くよみける

さく花のしたにかくるゝ人をおほみありしにまさるふちのかげかも（I・三二）

あるところに、さけのみなどして、ときのはなをりて、かめにさゝせたり、そのなかに、ふぢのはなあり、そこにある人よみをこせたるに、やりし

さくらばなしたにかくるゝひとをおほみありしにまさるふちのはな（傍「かげ」）かも（II・六四）

- 25 『公卿補任』によると、行平が左兵衛督の任にあつたのは貞観六年（八六四）三月八日（貞観十二年「尻付」）から貞観十五年（八七三）十二月十八日までである。一方、『弁官補任』によると良近の官歴は次のようになる。

貞観三年（八六一） 五月廿日任右少弁  
貞観五年（八六三） 二月十六日転左少弁  
貞観十二年（八七〇） 正月廿五日転右中弁  
貞観十六年（八七四） 左中弁（三代）

（『統群書類従』二十六輯上 所収）

（『統群書類従』二十六輯上 所収）

（『統群書類従』二十五輯下 所収）

（『増補史料大成』第六巻 所収）

延久三年（一〇七一）七月十九日『安鎮法日記』

永保三年（一〇八三）十月二十日『普賢延命法日記』

寛治六年（一〇九二）三月十九日『中御室灌頂記』

- 20 氏の作成された表にはない供花の用例が何件か確認できる。以下にそれをまとめると次のようになる。

万寿三年（一〇二六）三月二十日『左経記』

（『増補史料大成』第六巻 所収）

延久三年（一〇七一）七月十九日『安鎮法日記』

永保三年（一〇八三）十月二十日『普賢延命法日記』

寛治六年（一〇九二）三月十九日『中御室灌頂記』

（『統群書類従』二十六輯上 所収）

26 注4の清水好子氏のご論文にも、瓶に花をさした用例があげられており、重なるところも多い。しかし、氏の挙げられなかった用例や、解釈の異なるものもあるので、あえて筆者の探した用例すべてを挙げることにする。

27 この詞書によると、瓶にさしたのは「わか竹」であって、「花」ではないことが明らかであるが、瓶に何かをさす例としてあげた。これと同じ歌が『後撰集』巻第三・春下・八二・八三（八三は中務の返歌）、『拾遺集』巻第十六・雑春・一〇五四（貫之の歌のみ）にある。

『後撰集』・春下・八二・貫之 八三・中務

桜の花の瓶にさせりけるが散りけるを見て、中務につかはしける

ひさしかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれどうつるひにけり返し

千世ふべき瓶に挿せれど桜花とまらむ事は常にやはあらぬ

『拾遺集』・雑春・一〇五四・貫之

敦慶式部卿の親王の女、伊勢が腹に侍けるが、近き所に侍に、  
瓶に挿したる花を贈るとて

久しかれあだに散るなと桜花瓶に挿せれど移るひにけり

29 この歌・詞書ともに問題がある。『私家集大成』の解説（稲賀敬二氏）によると、底本は宮内庁書陵部蔵本（五〇一・一七六）であるが、谷山本（同列系本）により補入すると、二四四番歌とその詞書は次のようになる。

かめにさくらはなをさしたるを

あだにちるさくらなりともよろづ代のかめにさしてはひさしかり

あけくれにとはぬばかりをたまくしげそらなる花のいつかわする

◎大納言公任集・九〇

宮に、大夫の、くすりいれてたてまつりたりけるくしのはこを、ほどへて、秋立日かへすとて、いろ／＼の花どもをいれてかへさせ給ふとて

初かぜにのどけき花の露ならばきてみつべき玉くしげ哉

◎赤染衛門集Ⅰ・一二九（参考Ⅱ・一四）

一条院桜御覽じにわたらせ給しに、なやむ事ありて御供にまいらざりしかば、かへらせ給て、ちりたる花をつゝみてたまはせたりしに

さそはれぬ身にだになく桜花ちるをみつらん人はいかにぞ

33 同様に用例を挙げる。

◎中納言兼輔集Ⅰ・一五

さくらの花のちるをかきあつめてよさぶらひにおかせたまへりけるをみて、びはのおとど

ちる匂ひあだなる物といふなればかくてのみこそみるべかりけれ

◎堤中納言集（兼輔集Ⅲ）・一二

だいこのおほんとき、さくらはなはのちりたるをかきあつめて殿上におかせたまへるをみて

ひろひおきてみるひとあらばさくらばなちりてのゝちのくやしげもなし

34 これは、花を瓶にさした例歌としてあげた⑨（『伊勢大輔集』Ⅱ）と同じ歌である。しかし、Ⅱの詞書には「かめ」とあり、Ⅲの詞書には「すゞりがめ」とあったので、それぞれ例として挙げ

なむ

ふるくありし所の花をりて人のおこせたりしたてながらとおもひしものをさくら花おもひのほかにおもひけるかな

以上により、『私家集大成』の『道明阿闍梨集』二四四番歌の詞書は、もともと「あだにちる」の歌の詞書であったことが分かる。なお、同じ書陵部本を底本としている『新編国歌大観』は、谷山本による補入をした本文を載せている。

30 本文は、萩谷朴氏『平安朝歌合大成 増補新訂』（同朋社出版一九九五・十一）による。

31 『古今和歌集』・『伊勢物語』・『枕草子』の例を含む。また、「から竹」を瓶にさした⑩の例を除く。

32 以下にその用例を挙げる。

◎師輔集・六四・六五

富小路にえじ給ふ事ありて、さらにこじとて出給ふに、人くいみじうなきて、さくらをはこのふたにいでて、殿の女房のもとに

春風にまかせてもみぬ我袖のぬるゝかずにや花はちるらむ

五葉につけて、かへし

はるかぜにをしみもあへず散花の匂ひをいかでまつとどめぬ

◎中務集Ⅰ・一五三・一五四

はやすみしいへのさくらをはこにいでて、人

としをへてをりけるひととはなくにはるをすぐさぬはなを見よ

君

かへし

ることにした。

35 本文は『日本古典文学大系』による。

36 累計では四回となるが、馬内侍が『枕草子』二〇段のときに居合わせなかった可能性、また『馬内侍集』と『枕草子』の史実年時が重なる可能性も考慮し、三回とした。

付記

発行後、岩井宏子氏の御論文「古今集の良房歌の詞書に見るへ花がめに桜の花を挿す」と言うこと（『和漢比較文学』第十四号平成71）を佐田公子先生から御教示いただきました。

氏のご論は良房の瓶花の斬新性を説かれたものですが、良房以降の例を挙げた筆者の論と重なるところのあったことを報告いたします。